

The Journal
of
Flannery O'Connor

✦ フラナリー・オコナー研究 ✦

創刊号

日本フラナリー・オコナー協会

September, 2014

目 次

【創刊の言葉】

『フラナリー・オコナー研究』発刊に寄せて 野口 肇 4

【特別寄稿】

若き日のフラナリー・オコナー 野口 肇 6
— 『祈りの記』に寄せて —

【論 文】

National Identity and Immigrant Policy in Flannery O'Connor's "The Displaced Person" Kaori Horiuchi 21

会 則 45

投稿・執筆規定 46

報 告 47

編 集 後 記 48

『フラナリー・オコナー研究』 発刊に寄せて

日本フラナリー・オコナー協会

会長 野口肇

2013年3月、日本大学理工学部駿河台校舎において、「日本フラナリー・オコナー協会」が発足しました。そして発足2年目を迎えた今年、ここに協会の機関誌『フラナリー・オコナー研究』の創刊号が発行されることになりました。まことに喜びにたえません。

この場を借りて、まず、「日本フラナリー・オコナー協会」発足の経緯について、一言述べさせていただきたいと思います。私事で恐縮ですが、私がフラナリー・オコナー (Flannery O'Connor) を読み始めてから30数年経ちます。私が読み始めた当時、我が国ではアメリカ文学を専門にしている方の間でも、オコナーはそれ程読まれている作家とは言えず、言わばマイナーな作家で、「知る人ぞ知る」という存在でした。「女人受けする作家」という声もありました。それがいつの頃からか、「オコナー学会はないのですか」などと尋ねられるようになりました。また、最近、アメリカ文学が専門でない方からも、彼女のことを聞かれるようにもなりました。彼女を長いこと読んできた私にとって、彼女が人口に膾炙するようになってきたことは、嬉しい驚きです。おそらくその背景には、1989年に発表された、オコナーを専門に研究している女性を主人公にした大江健三郎氏の『人生の親戚』や、その後、オコナーの短編がほぼ翻訳されて出版されたことなどがあると思います。

そのような中、2012年12月に「日本キリスト教文学会」の月例研究会で、「アメリカ南部とフラナリー・オコナー」と題するシンポジウムが開かれました(彼女に関するシンポジウムは、1965年に同志社大学で行われて以来、我が国では初めてのものでした)。そしてその際の

パネリストから、オコナー協会を作ろうという声があがり、相談を重ねた結果、冒頭にも述べましたように、2013年3月に「日本フラナリー・オコナー協会」の発足を迎えました。

本協会の目的は、会員同士のオコナーに関する情報交換は勿論、互いに切磋琢磨し、刺激し合い、会員相互の研究の向上を目指していくものです。ゆくゆくは、本協会を我が国におけるオコナー研究の中核を担うものにしていきたいと願っています。さらに本協会には、会則にもありますように、オコナーと関連する作家や文学の流れについての研究を行うという大事な目的もあります。幅広い研究が、オコナーを一層深く理解するためには、是非とも必要なことであります。

オコナー自身、「小説がいつまでも理解できない部分を残す時、その作品はいいものだ」と述べています。また詩人の蜂飼耳氏は、オコナーの魅力は「何度読んでもわからない」ことだと述べていますが、そのようなオコナー作品の魅力を喧伝するのも、本協会の目的であり、延いては、会員諸氏の役目であると思います。

以上のようなことを鑑みますと、この度、本協会の機関誌『フラナリー・オコナー研究』が発刊の運びを迎えたことは、時機を得た、大変意義のあることだと思います。研究者にとって、自分の研究の研鑽を常に考えることは当然ですが、研究成果を社会に還元することも研究者の責務であります。機関誌は‘organ’と言われますが、本機関誌が会員の研究の発展に資する、密度の高い研究発表の場になることを期待するとともに、年に一度の大会と合わせて、本協会の大きな柱の一つになるよう、願ってやみません。そのためには原稿を寄稿する著者だけではなく、会員諸氏のご協力をお願いするものであります。

以上、『フラナリー・オコナー研究』発刊にあたり、一言、ご挨拶させていただきます。

2014年5月

【特別寄稿】

若き日のフラナリー・オコナー ——『祈りの記』に寄せて——

野口 肇

フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor) は、1945年9月から2年間アイオワ州アイオワにあるアイオワ州立大学(当時)の創作科で学び、修了後さらに1年アイオワに滞在する。彼女は1925年生まれであるから、まさに多感な青春時代を、アイオワで過ごしたことになる。断片的ではあるが、その滞在中に彼女が綴った日記が発見された。彼女は日記を残していないと言われていたが、ウィリアム・A・セッションズ (William A. Sessions) 氏が偶然発見し、編集して、『祈りの記』(*A Prayer Journal*. 以後、日記と言う) というタイトルで、2013年11月に出版した。拙文は、彼女の日記から、若き日のオコナーが何を思い、何を考えていたのかについて一瞥するものである。日記理解の一助のために、アイオワ滞在中の3年間の彼女を知る人の言葉や、筆者が直接当事者から聞いた話、あるいは筆者の手元にある資料なども織り交ぜて、当時の彼女の素顔にも触れていきたいと思う。

まず日記を発見したセッションズ氏について、一言、触れておこう。氏は詩人であり、劇作家でもあり、ヘンリー・ハワード (Henry Howard) やフランシス・ベーコン (Francis Bacon) などについての著書もある。現在はアトランタにあるジョージア州立大学名誉教授であり、オコナー研究の碩学としても知られている。氏はオコナー自身とその母親とも深交があった。また、サリー・フィッツジェラルド (Sally Fitzgerald) が編んだ書簡集『生きてある習慣』(*The Habit of Being*, 1979) で“A”とされているヘイゼル・エリザベス・ヘスター (Hazel Elizabeth Hester) 氏や、作家のキャロライン・ゴードン (Caroline Gordon) は、氏とオコナーの共通の友人であった(ちなみに『生きて

ある習慣』には、オコナーの氏に宛てた手紙が 15 通取められ、その他、彼女の他人宛の手紙でも氏の名前が何度か言及されている)。

ところで、筆者は 2008 年の夏、アメリカ南部の宗教風土の調査のために、当時の勤務校から研究費を支給され、アトランタに短期間滞在した。そのアトランタ滞在中の一夕、筆者はセッションズ氏に夕食に呼ばれた。筆者は 10 数年前に渡辺佳余子氏から氏を紹介していただいて以来、これまでに氏のアトランタのお宅に一再ならず泊めていただき、オコナーについていろいろと教えていただいたり、貴重な資料を見せていただいたりして、大変お世話になってきた。夕食を呼ばれたその日、奥様が食事の準備をしている間、リビングルームで食前酒をいただきながら雑談をしていると、氏は突然立ち上がって部屋を出て行き、何かコピーのようなものを持って戻ってきた。そして氏は、フラナリーに日記はないと言われているが、アイオワで過ごした時に書いたものが残っていて、それを自分が見つけたので、Hajime (筆者の名前) に少し読んであげようと言ってくれた。その言葉に、筆者は我が耳を疑った。なぜなら、オコナーが仮に日記をつけていたとしても、それが残っていたということは、初耳だったからだ。氏が読んでくれたのは、時間にして数分であった。読んでくれたのは 'Dear God' で始まる部分であった。後でも述べるように、'Dear God' で始まるエントリーは多くあり、今となってはどの部分かはっきりしないが、その時、彼女の神に祈る、真摯で、赤裸々な心の叫びの一端を聞いたような気がした。氏がここまでと言って終えた後、しばし感動し、言葉が出ないでいたが、奥様がやってきて、食事の支度が出来ましたよと仰有ったので、日記のことをお聞きすることは出来なかった。それ以後も筆者はお聞きしなかったので、日記の話はそれ以上出ることにはなかった。しかし、仮に日記についてお聞きしても、氏は当時、オコナーの伝記を執筆中で (2014 年 1 月末にいただいたメールによると、現在、校正中とのことである)、その中でこの日記について何か書くつもりであったかもしれないし、あるいは、他のところで日記について書こうとしていたかもしれないので、詳しいことを話してはくれなかったのではないかと思う。なぜなら、自分が見つけた貴重な資料のことを、公表する前にそう簡単に、特に同業者には言わないと思うからだ。とは言え、お聞きすればよかったという後悔の念が、今も残っ

ている。

セッションズ氏はその日記を2002年に見つけたという。氏はオコナーの母校(ジョージア州立女子大学当時)の図書館にある「フラナリー・オコナー記念室」の資料の中から、半世紀近く埋もれていた彼女の古いスパイラルノートを見つけ、それに日記が記されていたということだ。氏が読んでくれたのは、そのほんの一部であった。その日記が先程述べたように、氏の編集により、『祈りの記』と題されて、彼女の生前から長い付き合いがあった、ニューヨークのファラー・ストラウス・ジルー社から、2013年11月に出版された。縦およそ22㍻、横およそ16.5㍻、112頁からなり、ハードカバーである。口絵としてスカーフを被り、暖かそうなコートを着た、笑顔のオコナーの写真がある。彼女がポーズを取っている場所は、彼女がアイオワに行った1945年から47年までの最初の2年間を過ごした、イーストブルーミントン通り32にあった女性の大学院生用の寮、カリア・グラジュエイト・ハウスの玄関前で、47年2月に撮られたものである。なお、この写真は『フラナリー・オコナー ブルテン』(*The Flannery O'Connor Bulletin*, Milledgeville: Georgia College, 1983)の第12巻67頁に載っているものと同じである(カリア・グラジュエイト・ハウスについては、拙著『フラナリー・オコナー研究』で詳しく述べたことがあるので、ここでは省略する)。さて、日記の前半部はセッションズ氏の「序文」(Introduction)と「編集者覚書」(Editor's Note)、それに本文があり、その本文のおよそ半分弱は日付がない(セッションズ氏によると、オコナーは1946年1月から日記をつけていた¹⁾)。その後、1946年2月4日分から日付が入ったものが続き、最後は47年9月26日で終わっている。ただ日記は断片的なもので、毎日書かれていない。そして残念なことに、最初の数頁は失われている。また、頁の途中で失われている箇所が数カ所ある。後半部は、ペンと鉛筆で書かれた、少し読みにくい彼女の自筆の日記がファクシミリで掲載されている。上で述べた本文とは、手書きで書かれた日記を、綴り字の誤りなどを訂正したものである。

オコナーは1925年にジョージア州サヴァンナで、敬虔なカトリック教徒の両親の間に生まれ、彼女もカトリック教徒として育った。彼女が13歳の時、一家はほんの一時期、父親の仕事の関係でアトランタで暮らすのが、すぐに母と娘は母親の実家のあるミレッジビルに移る。母

親はミレッジヴィルの名家の出で、実家は 1820 年に建てられた、白い羽目板作りの、正面にイオニア式の円柱がある立派な建物である。ミレッジヴィルがジョージア州の州都であった時 (1804-68)、一時、州知事の邸宅にもなった由緒あるもので、現在は観光名所の一つになっている (セッションズ氏によると、敷地を囲む煉瓦の塀も人気があるという。しかしその煉瓦が、昔、奴隷によって焼かれたものであることを知る人は少なくなっているようだ)。父親は彼女が 16 歳になる直前に病気で死亡しているが、彼女はいわゆる南部のお嬢さんとして育てられ、大学を卒業するまでそこで暮らすのである。ところで、彼女が生まれ育った南部は当時、人種隔離政策が取られていた。例えば、彼女が生まれ、13 歳まで育った当時のサヴァンナの多くの生活施設は「白人用」、「黒人用」とに別けられていた。一例を挙げれば、7 つあったサヴァンナのカトリック教会は、4 つが白人用、3 つが黒人用であった²⁾。さらに、彼女が 13 歳から大学卒業まで暮らしたミレッジヴィルでも、ブラッド・ゲーチ (Brad Gooch) によれば³⁾、学校は白人と黒人は別々であり、「クー・クラックス・クラン」(the Ku Klux Klan) の活動も盛んで、例えば、オコナーが病を得て、後半生の約 13 年あまりを暮らしたミレッジヴィル郊外のアンダルシア農場では、実際に 3 人の新入会員の入会儀式で、十字架が燃やされたこともあったという。また彼女の通ったジョージア州立女子大学は、白人学生のみであった。大学の公式ホームページによると⁴⁾、黒人が初めて入学したのが 1964 年で、それは彼女が死亡した年である。

オコナーは 1945 年に大学を卒業後、その年の 9 月に奨学金を得てジャーナリズムを学ぶために、アイオワ州立大学へ行く。しかし、彼女はアイオワ州立大学に行つてすぐの翌 10 月に、創作科のディレクターであったポール・エンゲル (Paul Engle) を研究室に訪ね、創作科に移りたいと話し、許される。そして氏のクラスに出席するようになるが、その時の二人の初対面の様子を、筆者は氏にインタビューした際にお聞きしたことがある。その内容については、筆者は『フラナリー・オコナーの世界』、『アメリカ南部の宗教風土 — フラナリー・オコナーの生きた世界』で記したことがあるので、興味のある方は参照されたい。エンゲルは作家であり詩人であると同時に、25 年間 (1941-66) の長きにわたつて創作科のディレクターとして活躍し、ア

イオワ州立大学の創作科を全米でトップクラスに育てたことでも有名である。彼女は氏の指導を受け、芸術修士号を取得するが、氏は生涯を通じて彼女の師となる。彼女が創作科に移った理由を、氏は「真実や事実をありのままに伝えるジャーナリストより、自分自身の真実を創作したかったのだ⁵⁾」と、インタビューで話してくれた。

ところで、南部のお嬢さんとして育った彼女は、アイオワで南部で体験し得ない人間関係を持つようになる。例えば、黒人との付き合いである。母親は黒人に差別意識を持っていたが⁶⁾、セッションズ氏によれば⁷⁾、オコナーはアイオワ州立大学で黒人の女性大学院生と親しくなり、何度も食事を共にするようになる。しかし、母親はその学生と娘が付き合うのに反対したという⁸⁾。また創作科のクラスには、筆者がインタビューをお願いしたオコナーと一緒にエンゲルのクラスに出ていたケイ・バフオード (Kay Burford) 氏によると⁹⁾、第二次世界大戦を戦って帰国し、いわゆる GI ビルを利用した復員兵も多くいて、クラスはとてもませていたという。中には無骨でがさつな学生もいたとのことである。オコナーには戸惑ったり、驚くことが多かったのではないかと思われる。その創作科のクラスというのは、学生が自分の作品を朗読し、それに対して他の学生が遠慮会釈のない厳しい批判をするといったものであった。一言付言すると、オコナーは後年、創作科のこのような授業のやり方を強く批判している¹⁰⁾。いずれにしても、W. J. キャッシュ (W.J. Cash) の言葉を借りて言うなら、「アメリカにあってアメリカの他の地域とは別の国¹¹⁾」と言われる南部からアイオワにやってきた当初、敬虔なカトリックでお嬢さん育ちの彼女は、いわば、一種のカルチャーショックを受けたのではないか。そして、アイオワにやってきて数ヵ月後、良くも悪くも新しい環境の中で暮らしている最中に、日記は書き始められる。この時、彼女は 20 歳の後半であった。

では、次にその日記について述べてみたい。この日記を一読してまず感じるのは、神を愛したい、どのように愛すればいいのか、あるいは神のそばにいたいという彼女の等身大の姿で、率直で、真摯で、懇願するような、内面から湧き上がる心の叫びである。文体は非常に簡潔で直截である。それだけ一層、読む者の心に訴えてくる。そして、セッションズ氏も言うように¹²⁾、時には、これは日記というより、愛の手紙のようでもある。その相手は神である。内容と相俟って、‘My dear God’、

‘Dear Lord’、‘Dear God’などで始まっている書き出しが多いこと、また本文中に ‘Dear God’、‘dear God’、‘Father’などの言葉が散見されることも、その一因と言える。それではいくつか、その心の叫びに耳を傾けてみよう。「私は、おお主なる神よ、信仰を失うのが恐いのです。私の心は強くないのです¹³⁾」、「主なる神よ、主なる神よ、と言う人ではなく、私の父の意思を行う人になりたいのです。どうぞ私の父の意思を知る手助けをしてください」(PJ, p.5. 傍点原文大文字)、「でも、あなたのそばにいたいのです」(PJ, p.13. 傍点原文大文字)、「誰も私に祈る方法を教えてくれることができないの?」(PJ, p.23)、「私は感じたいのです。愛したいのです。私を連れて行って、ああ神様、そして私が行くべき方向に置いてください」(PJ, p.35)、「主なる神様、お願いしますから、私にあなたを求めさせてください」(PJ, p.36. 傍点原文大文字)、「私の思いは神からとても離れています」(PJ, p.40)、「この心に神を抱きしめることができれば。いつも神のことだけを考えることができれば」(PJ, p.39. 傍点原文大文字) などという言葉が見られる。一途に神を求める狂おしいほどの気持ちが、赤裸々に綴られている。この気持ちの裏には、故郷を、また親元を離れた寂しさ、孤独感も、多少あったのかもしれない。しかし、このような真摯な気持ちにもかかわらず、否、むしろそれだからこそ、彼女は自分の祈りに懐疑的になったり、不満を感じることもあったと言える。そんな気持ちを吐露するかのよう、「自分がこれまでずっと口にしてきた今までのお祈りを否定するつもりはありません。ですが、お祈りを口にしてはきましたが、感じてはいませんでした」(PJ, p.4)、「覚えているいくつかのお祈りの言葉を急いで言うだけです」(PJ, p.12)、「強い人ならいいのに。……私はとても弱い人間です」(PJ, p.37) と書くのである。自分の心の伴わない信仰や不誠実な祈りについて、まるで神に懺悔をしているようだ。「祈りは礼拝、痛悔、感謝、祈願からなるべきだと、理解しています」(PJ, p.8) と記す彼女にとって、神を求めることは全身全霊を捧げるものであった。

次に日記を読んで感じることは、世俗的に成功したい、いい作品を書きたいという、物を書く大方の人が持つ野心や名声への正直な思いだ。いくつかの言葉を引いてみよう。「私は自分がしたいと思っていることで、世の中でとても成功したいと思います。このことを、一生懸命あ

あなたにお祈りしています」(PJ, p.3. 傍点原文大文字)、「どうぞお願いですから、神様、よい作家になれるようにお助けください」(PJ, p.10)、「あゝ神様、私は小説を書きたいのです、いい小説を」(PJ, p.18)、「私は素晴らしい作家になりたい」(PJ, p.23. 傍点原文下線)、「神様、芸術家になれるよう、お願いですからお助けください」(PJ, p.29)、「最高の芸術家になりたいのです。私はなれます、神様の指導のもとに」(同)などといった言葉が見られる。先程述べたように、1945年の10月にオコナーは初めてエンゲルをその研究室を訪ねるが、その時、彼女は「作家になりたい」ではなく、「私は作家です」と言ったと、氏が筆者に話してくれた¹⁴⁾。それから数カ月後、彼女は「よい作家」、「素晴らしい作家」になって、「いい小説」を書きたいという、作家としてより具体的に、生涯に賭ける夢への熱い思いを綴るようになる。と同時に、それは将来への不安の裏返しとも言える。だからこそ、彼女は真剣に神に祈ったとも言える。

では、彼女が書こうとしていた「いい小説」とは、何だったのか。それは、「私は美しい祈りを書きたいと思います」(PJ, p.7)と述べているように、「美しい祈り」のことであった。しかし、その「美しい祈り」とは何か。その手掛かりは、「どうぞキリスト教の教義で、私の書くものを満たしてください」(PJ, p.5)という言葉にある。おそらくその思いが、後年「カトリック作家と読者」(“Catholic Novelists and Their Readers”)の中で、彼女が「聖グレゴリウスは、聖書は一つの事実を描写するたびに、神秘を明らかにする、と書いた¹⁵⁾」と述べ、続いて、「聖書より低い次元ではあるが、このことを小説家は行いたいと思う¹⁶⁾」という言葉に繋がっていくのであろう。つまり、この言葉を援用するならば、カトリック教徒であった彼女にとって「美しい祈り」とは、あるいは「いい小説」とは、聖書にも似た「神秘」を露わにする小説のことであったと言える。それ故、彼女が考えていた「よい作家」、「素晴らしい作家」というのは、単に有名になったり、名声を求めるといった世俗的のものではなく、この日記が終わっている2日前の記述に見られる、「ああ、主なる神様……私を神秘家にしてください、今すぐに」(PJ, p.38)という言葉を使えば、作品を通して、「父の意思」を書く「神秘家」になるということではなかったのかと、思われる。彼女は生涯、神の存在と支配、あるいは人間存在の中心にある神秘を追求したが、その萌芽は、アイオワ滞在中に書き始

められた処女長編に、すでに見られるのである。先程触れたバフォード氏が、筆者とのインタビューの中で仰有った、オコナーは「初めから主題を知っていたんです。若い時から何を書きたいのかはっきりわかっていたのですね¹⁷⁾」という言葉は、氏がオコナーと寮で同室であった人の言葉だけに意味深長である。

さらに、日記を読んで気がつくことは、日記に [フランツ] カフカ (Franz Kafka)、[シグモンド] フロイト (Sigmund Freud)、[サムエル・テイラー] コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge)、[マルセル] プルースト (Marcel Proust)、[D.H.] ロレンス (D.H. Lawrence)、[レオン] ブロイ (Léon Bloy) などの名前が見られることである。このことは注目してもいい。なぜなら、オコナーの 1955 年 8 月 28 日付の“A” (前出のヘスター氏のこと) に宛てた手紙で¹⁸⁾、アイオワに行くまであまり読書をせず、アイオワに行くまで [ウィリアム] フォークナー (William Faulkner)、カフカ、[ジェイムズ] ジョイス (James Joyce) の名前も聞いたことはなく、ましてや読んだこともなかったと述べている彼女が、アイオワ滞在中に多くの読書をしたことを、窺い知ることが出来るからである。事実、その手紙にはアイオワに行ってから一度にあらゆるものを読んだと書かれ、実際に読んだカトリック作家、アメリカ南部の作家、ロシアの作家などの名前が数多く言及されている¹⁹⁾。彼女にとって読書は、勿論、楽しみのためでもあったかもしれないが、むしろ書くことを学ぶために必要なことだと思っていたのではないか。果たせるかな、その手紙には [ナサニエル] ホーソン (Nathaniel Hawthorne)、[ギュスタヴ] フローベル (Gustave Flaubert)、[オノレ・ド] バルザック (Honoré de Balzac) から学び、面白いことに、何一つ全部通して読んだことがないのにカフカからも学んだこと、また [ジョセフ] コンラッド (Joseph Conrad) を崇拜するようになったことなどが書かれている。このように彼女がアイオワに行ってから幅広く、貪欲に読書をしたことがその手紙からわかるが、その読書の一端が日記からかい間見え、興味が引かれる。ちなみに、アイオワに行くまで名前も聞いたことがない、読んだこともないと述べていたカフカについては、日付のないエントリーにその名前が二度見られるので (PJ, p.13,16)、アイオワに行っ

てすぐに読んだと思われる。

次に、日記理解のために、アイオワ滞在中の彼女を直接知る人の声

を聞いてみよう。筆者が今まで拙著などで述べてきたことと重複する部分もあることを、お断りしておきたい。先程も触れたように、アイオワでの1945年から47年の最初の2年間、彼女はイーストブルーミントン通り32にあった大学寮のカリア・グラジュエイト・ハウスで過ごした。その寮で1943年から44年まで暮らしていたマーガレット・H・ピントラー (Margaret H. Pintler) 氏は、筆者に、自分は時期的に言ってもオコナーと面識がなかったが、彼女を知っていた寮の友人の言葉として、「いつも部屋でタイプを打っていた。一度は、オコナーの部屋のドアが開いていて、背中をドアに向けて、髪に羽をさしてタイプを打っていた彼女を覚えている²⁰⁾」という言葉を教えてくれた。また、47年2月4日から6月7日まで、寮で同室であったマーサ・ベル・スプリーザー (Martha Bell Sprieser) 氏から、筆者は、オコナーは「普段は書くことに専心し」、「静かで気取らず、内向的で、深い信仰を持ち、また素晴らしいユーモアのセンスを持っていた」という内容の手紙をいただいた²¹⁾。ちなみに、日記の口絵の写真は、彼女の提供である。アイオワでの3年目は寮を出て、イーストブルーミントン通り115にあった、当時、100歳くらいになるグゼマン夫人 (Mrs. Guzeman) がやっていた下宿屋で暮らすようになる。47年の秋と翌48年の春の学期で創作科で一緒だったジーン・ワイルダー (Jean Wylder) 氏はその回想録で、一度だけ入ったことのあるそのオコナーの部屋について、「余計なものはなく、飾り気のない部屋に、きちんと整えられたベッド、机の上にタイプライター、その横にはバニラのウエハース²²⁾」があったと述べている。さらに氏はその回想録の中で、オコナーは「静かで禁欲的な尼僧のような娘²³⁾」であったという、友人の言葉を紹介している。ちなみに、このグゼマン夫人の家は灰色の大きな家で、下宿していた部屋はけっして十分に暖かくならず寒かったと、後年、オコナーはワイルダー氏に書いている²⁴⁾。1986年9月28日付の『デモイン・サンデー・レジスター』紙 (*The Des Moines Sunday Register*) によると、「寒い、すきま風の入る部屋」であったという。その部屋で寒い冬を過ごすその姿に、ニューヨークの凍るような寒い部屋で、一晩中寒さに震えている「長引く悪寒」 (“The Enduring Chill,” 1958) の主人公、アズベリー・ポーター・フォックス (Asbury Porter Fox) が思い出される。さらに「禁欲的で尼僧のような」オコナーは、アルコールも煙草もやらず、また、クラスの仲間

たち、言うなれば作家の卵たちがよく出入りしていた酒場にも行くことはなかった。当時の彼女を知る人は、例えばスプリーザー氏も、ワイルダー氏も、エンゲルも異口同音に、彼女は「社交的」ではなく、「内気」で、「静かで」、「地味で化粧っ気のない」人で、友人も少なかった旨を述べている。また、創作科の授業でのオコナーの様子について、ワイルダー氏は「フラナリーはクラスの議論にはけっして入らなかった²⁵⁾」と記し、エンゲルは筆者に、「フラナリーはクラスの討論には加わず、一言も言わず、誰かが馬鹿な真似をしたり言ったりすると口に手をやって笑っていた²⁶⁾」と、話してくれた。そして、クラスに出たり読書をしたり、書いたりする中で、熱心なカトリックであった彼女は毎朝、大学近くの聖メアリー教会のミサに出席したり、あるいは大学から歩いてすぐのところにあった、市営公園に一人でよく出掛けた。その公園は彼女のお気に入り入りの場所で、その目的は、当時公園内にあった動物園の動物を見に行くためであった。ちなみに、アイオワを去った翌年の2月に発表された「公園の中心」(“The Heart of the Park,” 1949)では、その公園が市営森林公園として描かれ、さらに地方から出てきてその公園で守衛をし、勤務時間が終わると、毎日、公園内の動物を見に行く若者が登場する。その挿話のアイディアは、この作品の発表時期から考えると、オコナー自身の経験と無関係ではないだろう。いずれにしても、上で引いたような、アイオワ滞在中の彼女を知る人の断片的な逸話やエピソードから、自分を律して、「いい小説」を書きたい、「よい作家」になりたいという目的に向かって一途に進む、禁欲的な生活を送っていた彼女の姿が、一種の見事なタペストリーとして目に浮かぶ。いずれにせよ、アイオワ滞在中の彼女の素顔を知る人の言葉は、日記理解の一助となる。

アイオワ滞在中に、彼女の「ゼラニウム」(“The Geranium”)が『アクセント』(Accent)誌の1946年夏号に載り、彼女は‘a published writer’(雑誌に掲載された作家)となる。さらに、同年のクリスマスには最初の長編小説を書き始め、またエンゲルの推薦で、47年春にはその長編小説の冒頭の部分となる数章によって、ラインハート・アイオワ小説賞を受賞し、賞金750ドルを得る。同年5月29日付の『デイリー・アイオワン』(The Daily Iowan)紙に、「フラナリー・オコナー／ラインハート・アイオワ小説賞／受賞」(Flannery O'Connor/ Wins

Rinehart-Iowa /Award for Novel) という記事が載り、その中で彼女は受賞の喜びと共に、「来年もこの大学にいて、今の小説を書き上げるのに十分なお金をいただけるということです」と述べている。47年6月には短編小説6篇（「ゼラニウム」、「床屋」“The Barber,” 「山猫」“Wildcat,” 「収穫」“The Crop,” 「七面鳥」“The Turkey,” 「汽車」“The Train”）を修士論文として提出し、芸術修士号を得る。この修士論文はエングルに捧げられている。そして、今も引いた新聞記事の言葉にもあるように、彼女は修士号を得た後、もう1年大学に残るのである。それはラインハート・アイオワ小説賞で得た賞金に加え、エングルが彼女にティーチング・アシスタントとして、セクションで教えるようにと言ったからである。そして、48年の『スワニー・レビュー』(*The Sewanee Review*) 誌の春号には「汽車」が掲載される。このように、アイオワで彼女は作家として確実にその地歩を築いていくが、同年6月、エングルと、創作科で教えを受けたアンドルー・ライトル (Andrew Lytle) の推薦を受け、書きかけの長編小説を持って、ニューヨーク州サラトoga・スプリングスにある芸術家村ヤドーで創作活動に専念するために(ヤドーについては、拙著『フラナリー・オコナーの世界』参照)、アイオワを離れ、その後、二度とアイオワに戻ることはなかった。「フラナリーは素晴らしい原稿をアイオワに残していった²⁷⁾」とは、エングルの言葉である。

神を信じたい、いい作品を書きたいと願う日々の中で、日記は1947年9月26日の、「私について言うべきことは、何も残っていない」(*PJ*, p.40) という言葉で終わっている。しかし、48年に彼女はアイオワを去ってから64年に亡くなるまで、逆説的に言えば、彼女は作品を通して、自分の言うべきことを残したのである。そして、彼女の作品が多くの言葉に翻訳されているのをはじめ、我が国や世界の多くの国で読まれていること、またO.ヘンリー賞をはじめとして、多くの文学賞を受賞しているという事実などを考えると、アイオワでの「よい作家」、「素晴らしい作家」となって「いい小説」を書きたいという彼女の祈りは、叶えられたのである。エングルが「才能豊かで、聡明で、芯の強い女性だった²⁸⁾」と評したオコナーは、見事にその才能を開花させ、花開いたのであった。

オコナーは自分のことを「スプリングについてはひどく無邪気な人²⁹⁾」

と呼んでいたが、筆者もそのことについては、特に2008年の夏にエモリー大学の図書館で、彼女のヘスター氏宛ての手書きの手紙³⁰⁾を読んだ時に感じたことであつた。そして、この日記(ファクシミリ)についても同じことが言える。本文では「編集者覚書」にも記されているように、綴り字などの誤りは訂正されている。しかし、筆者はエモリー大学で彼女のヘスター氏宛の手紙を読んだ時に感じた彼女のぬくもりや息遣い、彼女に対する親近感を思い出し、また、日記についてではないが、綴り字の誤りを直してしまうと、「彼女の手紙のもつ薫りの一部が消えてしまう³¹⁾」と述べているフィッツジェラルドの言葉が脳裏を横切り、本を手にした時、まず初めにファクシミリの部分、つまり、手書きの日記を通読した。所々黒く消したところがあつたりして、彼女も人の子だなど思いながら、改めて彼女を身近に感じ、親近感を覚えた。

オコナーの内面を知るためには2冊の書簡集、つまり、先程も触れたフィッツジェラルドが編んだ『生きてある習慣』と、チャールズ・ラルフ・スティーヴンズ(Charles Ralph Stephens)が編んだ『フラナリー・オコナーとブレイナード・チェイニー家の往復書簡集』(*The Correspondence of Flannery O'Connor and the Brainard Cheneys*, 1986)、さらにオコナーのヘスター氏宛への手紙、及びフィッツジェラルド夫婦(Sally Fitzgerald and Robert Fitzgerald)の編集した『秘義と習俗』(*Mystery and Manners*, 1969)がある。そして今回、新たにこの日記が加わつた。20歳後半から22歳のまだ世間ずれしていない、うら若い女性の、信仰に悩み、信仰を求める誠実な声がそこにはある。うぶで純真で、神を愛し、信仰を確固たるものにしようとする彼女の切々たる心の叫びは、感動的で読む者の心を捕らえて離さない。それは彼女が、神を人生の同伴者と思ひ定めていたからだろう。と同時に、そこにはまた、自分に才能があるとはけっして自惚れたり、傲ることなく、謙虚に、かつ厳しく自分を見つめ、神の助けを借りて作家になりたい、いい作品を書きたいという率直で、切実な願いがある。そこには、後年、ある手紙で、「シモーヌ・ヴェイユは我々を謙遜へと止めておく神秘の体現者で、私には、何よりもそうした神秘が必要だ³²⁾」と述べる彼女の姿がすでに見られる。若い時から、人間は神の前であつて卑小な存在であり、無力であることを、カトリック教徒の彼女は知っていたのだ。

いずれにしても、この日記に見られる 20 歳後半から 22 歳にかけての若き日のオコナーの精神的な自己洞察は、読む者に新鮮な衝撃と驚きを与えてくれる。さらに、おそらく読まれることを想定していなかったと思われるこの日記は、それだけに自分の気持ちを素直に吐露した、非常に私的で個人的なものであり、読む者は彼女のそばにいて彼女の息遣いや、彼女の生身の声を聞いているような気にさせられる。それは彼女の作品に見られるような、対象と距離を置いて、冷徹で、客観的で、突き放したような硬質で乾いたものとは違う。その落差を味わうのも、この日記を読む楽しみの一つと言える。

この日記はオコナーの読者、研究者にとって大変貴重な第一次資料である。是非とも、一読を勧める。また、彼女は現代を「信じることがむづかしい時代³³⁾」であり、そして「その場限りの信念であちこち流されている時代³⁴⁾」と述べているが、もしそうだとすれば、彼女に関心を持つ人のみならず、さらに多くの人にも、この日記が読まれることを願ってやまない。

注

- 1) W.A. Sessions, Introduction, *A Prayer Journal* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2013), p.vii.
- 2) Jean W. Cash, *Flannery O'Connor: A Life* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 2002), p.2., Brad Gooch, *Flannery: A Life of Flannery O'Connor* (New York: Little, Brown and Company, 2009), p.17 など参照。
- 3) Brad Gooch, *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*, p.244 参照。
- 4) <http://www.gcsu.edu/about/history.htm>
- 5) 拙著『フラナリー・オコナーの世界』(文化書房博文社、1988)、42 頁参照。
- 6) Jean W. Cash, *Flannery O'Connor: A Life*, pp.148-49, Brad Gooch, *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*, pp.243-44 など参照。
- 7) W.A. Sessions, Introduction, *A Prayer Journal*, p.x.
- 8) Ralph C. Wood, *Flannery O'Connor and the Christ-Haunted South* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2004), p.102.
- 9) 拙著『フラナリー・オコナーの世界』、43 頁。
- 10) Flannery O'Connor, "The Native and Aim of Fiction," *Mystery and Manners*, eds. Sally Fitzgerald and Robert Fitzgerald (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979), p.86.

以下、同書からの引用に当たっては作家名、作品名、書名、頁数のみを記す。

- 11) W.J. Cash, *The Mind of the South* (New York: Vintage Books, 1991), p.xlvii 参照。
- 12) W.A. Sessions, Introduction, *A Prayer Journal*, p.ix.
- 13) Flannery O'Connor, *A Prayer of Journal* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2013), p.5
以下、同書からの引用は PJ と記し、本文中の括弧内にその頁数のみを示す。
- 14) 拙著『フラナリー・オコナーの世界』、40 頁。
- 15) Flannery O'Connor, "Catholic Novelists and Their Readers," *Mystery and Manners*, p.184.
- 16) *Ibid.*
- 17) 拙著『フラナリー・オコナーの世界』、44 頁。
- 18) 本論中におけるオコナーの手紙の引用は、Sally Fitzgerald (ed.), *The Habit of Being* (New York: Vintage Books, 1980) に拠る。
- 19) その手紙に言及されている主な作家に、カトリック作家としてフランソワ・モーリアック (François Mauriac)、ジョルジュ・ベルナノス (Georges Bernanos)、レオン・ブロイ、グレアム・グリーン (Graham Greene)、イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh)、アメリカ南部作家としてウィリアム・フォークナー、アラン・テイト (Allen Tate)、キャロライン・ゴードン、K.A. ポーター (K. A. Porter)、ユードラ・ウエルティ (Eudora Welty)、ピーター・テイラー (Peter Taylor)、ロシアの作家としてフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー (Fyodor Mikhailovich Dostoyevsky)、イワン・セルゲエヴィチ・ツルゲーネフ (Ivan Sergeyevich Turgenev)、アントン・パーヴロヴィチ・チェーホフ (Anton Pavlovich Chekhov)、ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ゴーゴリ (Nikolay Vasilyev Gogol) などがいる。
- 20) 拙著『フラナリー・オコナー研究』(文化書房博文社、1992)、20-21 頁。
- 21) 同、26 頁。
- 22) Jean Wylder, "Flannery O'Connor: A Reminiscence and Some Letters," *The North American Review*, Vol.255, No.1, Spring (Cedar Falls, Iowa: University of Northern Iowa, 1970), p.59 参照。
- 23) *Ibid.*, p.58.
- 24) *Ibid.*, p.60 参照。
- 25) *Ibid.*, p.58 頁参照。
- 26) 拙著『フラナリー・オコナーの世界』、43 頁。
- 27) 拙著『アメリカ南部の宗教風土——フラナリー・オコナーの生きた世界』(文化

書房博文社、2009)、167 頁。

28) 同。

29) Sally Fitzgerald, *The Habit of Being* (New York: Vintage Books, 1980), p.xii.

30) オコナーがヘスター氏に宛てた 274 通の手紙が、2007 年 5 月にアトランタのエモリー大学で公開された。ヘスター氏は自分宛へのオコナーの手紙を、今後 20 年間公開しないという条件で、1987 年にエモリー大学に寄贈したのである。本文中でも述べたが、筆者はアメリカ南部の宗教風土の調査のために、2008 年の夏、アトランタに短期間滞在したが、その際、その手紙を読む機会を持った(手紙はエモリー大学で手続きをすれば、閲読可能)。その手紙について筆者は、拙著『アメリカ南部の宗教風土 — フラナリー・オコナーの生きた世界』で書いたことがあり、興味のある方は参照されたい。

なお、上記オコナーのヘスター氏宛の手紙の多くは、書簡集『生きてある習慣』で読むことができる。但し、書簡集では編まれた当時のヘスター氏の意向で“A”となっている。オコナーの『善人は見つけがたし、その他の物語』(*A Good Man Is Hard to Find and Other Stories*)が 1955 年 6 月に発表されるが、翌 7 月に、彼女は未知の読者から手紙を受け取る。手紙の送り主がヘスター氏である。その手紙に、自分の作品の意図を的確に理解してくれる読者と出会ったことを喜んだオコナーは、すぐに返事を書く。ヘスター氏は、アトランタに住む若い女性で、以来、二人はオコナーの死までの 9 年間、手紙のやり取りをし、時に会ったりもするようになる。

31) Sally Fitzgerald, *op.cit.*, p.xii.

32) オコナーの 1956 年 12 月 28 日付、“A”宛の手紙参照。

33) オコナーの 1959 年 9 月 13 日付、ジョン・ホークス (John Hawkes) 宛の手紙参照。

34) Flannery O'Connor, “Some Aspects of the Grotesque in Southern Fiction,” *Mystery and Manners*, p.49 参照。

※本稿は、2014 年 3 月 26 日に行われた「日本フラナリー・オコナー協会第 2 回大会」において、同名のタイトルで講演したものを、活字に起こしたものである。

【論 文】

National Identity and Immigrant Policy in Flannery O'Connor's "The Displaced Person"

Kaori Horiuchi

1. Catholic and Communism

Flannery O'Connor's "The Displaced Person" (1954) exposes the political and social systems in which individuals with aggrieved feelings against national policies turn themselves, consciously or unconsciously, into perpetrators of a violent crime. In recent years, several critics have proposed new analyses of this story, for example, Rachel Carroll's psychoanalytical approach, Garifallia Doriza's work of alienation by invoking Martin Buber's theory of communication, and William Burke's scrutiny pointing out "a connection between home in the material and home in the spiritual realms" (219).

However, the sociocultural aspects of O'Connor's works have been not yet properly understood in previous studies which have primarily focused on Southern characteristics in her fiction. Exploring this point from a historical viewpoint, I bring to light the fact that the secular aspects of the story can be considered as a positive condition, pushing characters to reach the threshold of spirituality. Additionally, few studies explore the role of the Polish refugees from a historical perspective except for Alan C. Taylor's analysis which problematizes the similarity between Southern blacks and Poles in America. This paper examines the question of immigrant policy and the breakdown of social hierarchy in the Cold War era to show O'Connor's interest in nationwide sociocultural incidents.

Concerning the Polish displaced person, the key concept that one should note is the myth of unity between the body and subjectivity. In the story, this myth is portrayed through the image of dismemberment that a newsreel propagates. Mrs. McIntyre, who runs a dairy farm in Georgia, hires the Guizacs, a Polish refugee family, on the recommendation of a parish priest, Father Flynn. The presence of Polish immigrants reflects a political situation typical of the Cold War era. As Connie Ann Kirk reports, in 1952 or 1953, there lived an actual Polish immigrant family, the Matisiacks, on the Andalusia farm that O'Connor's mother owned (49). The character of Mr. Guizac may, therefore, be based on the author's real experience, although the exact circumstances are unknown. After World War II, the American government attempted to extend democracy over communist ideology in Europe. In 1946, President Truman addressed the role of the United States in international society: "If we are to fulfill our responsibilities to ourselves and to other peoples, we must make sure that the United States is sound economically, socially, and politically" (92). At the beginning of the story, Mrs. Shortley, a poor white employee, remembers a newsreel about the Holocaust.

Mrs. Shortley recalled a newsreel she had seen once of a small room piled high with bodies of dead naked people all in a heap, their arms and legs tangled together, a head thrust in here, a head there, a foot, a knee, a part that should have been covered up sticking out, a hand raised clutching nothing. Before you could realize that it was real and take it into your head, the picture changed and a hollow-sounding voice was saying, "Time marches on!" This was the kind of thing that was happening every day in Europe where they had not advanced as in this country,...

(*Collected Works* [CW] 287)

As several critics indicate, O'Connor got the idea for the news reel in the story from *The March of Time*, a newsreel series

created by Time, Inc.¹ The series was released in movie theaters in the 1930s and 1940s, and had gained nationwide popularity. The newsreel Mrs. Shortley recollects did not provide her with an understanding of the reality of the genocide. What makes the newsreel suspicious is its propagandist message: “Time marches on!” (287). Under the guise of a positive attitude toward the world, the catchphrase adroitly hides inconvenient realities. Although O’Connor does not criticize anti-Semitism directly in her fiction, she writes: “I’ve always been haunted by the boxcars [to a concentration camp]” (*The Habit of Being* 539). Her comment conveys her eager interest in the tragedy. The positive image that is authoritatively created by the newsreel to enhance American supremacy exerts a harmful influence on the private person’s ability to understand the refugees’ particular situation.

Although the American government welcomed the refugees in opposition to Communism, these refugees became a cause for anxiety for the general population. As Roger Daniels observes, a large number of Americans were afraid that “the country might be swamped by refugees from a devastated Europe that was economically insecure and politically unstable, with Communist parties growing in almost every nation” (329). Jon Lance Bacon accurately indicates that “[x]enophobia underlay the analogy between Catholicism and Communism” in O’Connor’s fiction (74). His fruitful discussion has enlightened researchers a great deal, in particular on O’Connor’s awareness of sociocultural matters. While Bacon regards O’Connor as “a defender of Southern identity during the Cold War” (97), I will exemplify her concern about nationwide events which are not limited to the South. In addition, despite his valid observations on the association between Catholicism and Communism, his arguments sometimes become too ideologically conceptual. To avoid such a pitfall, this relationship should be presented in a more specific way.

A historical fact causes us to surmise that sagacious readers

of those days would have promptly realized Father Flynn's linkage with Communism. In the story, the priest and the Polish displaced person, both Catholic believers, are gradually neglected by the farm community. I may point out here that the priest's name, Father Flynn, coincides with Elizabeth Gurley Flynn, a well-known activist who joined the American Communist Party in 1936. Although previous studies make no reference to her, the correspondence between these names conveys the impression that Catholicism was associated with Communism in the United States at that time. Elizabeth Gurley Flynn was apprehended and accused of "violating the Alien Registration Act" in 1951 (Ford 192). On the morning of June 20, 1951, twenty-one communist party leaders were simultaneously arrested. The incident was splashed across the front page of the next day's morning papers. *The New York Times* placed Elizabeth Gurley Flynn at the head of the list of the newly indicted (Porter). The July 2, 1951, issue of *Time* also had an article on the incident with a photograph of four communists including Elizabeth Gurley Flynn.

Besides his name, other connotations of Father Flynn's relation with communism are visible in the story. One should remember that Father Flynn vigorously advocates the reception of the refugees, that is, foreigners. His face is "homely red" (CW 289), and Mrs. Shortley, wary of "the dangerous presence of the priest" (302), watches the Catholic priest vigilantly: "Whenever he came on the place, she hid herself behind something and watched until he left" (301). Assuming that there is an association between Catholicism and Communism, it is not untruthful to say that Mrs. Shortley's behavior vaguely suggests the monitoring of communist activities: so-called "McCarthyism." Equally significant is that O'Connor applies an expression reminiscent of Red-bait to Father Flynn. While he talks with Mrs. McIntyre about the Polish refugee, the priest pays attention to turkeys in a cage, getting "close to the wire" (302), and joggling

“his finger inside the wire” (303). One can safely state that his action brings to mind a detainee interned under strict security. In a very intentional fashion, the word “wire,” which evokes barbed-wire entanglements, is used only for descriptions of Father Flynn. O’Connor does not support communists, but the characteristics of Father Flynn suggest exclusionism and a feeling of entrapment, which are brought about by the body politic.

A similar association between Communism and foreigners is seen in *Wise Blood*. In Chapter 3 of the novel, a man selling peelers abuses Hazel Motes and Asa Hawks, a bogus blind preacher, because he is hindered in his work: “These goddam Communist foreigners!” (CW 21). The salesman’s vituperation manifests that people judge communists and non-American citizens as one and the same. In addition, anxiety about a foreign religion is found in Chapter 6. When Hazel Motes rents a room in a boardinghouse, the landlady asks him about his religious denomination: “Protestant?’ she asked suspiciously, ‘or something foreign?’” (60). Hazel Motes, who aims to organize a peculiar church, deceives her by telling her that he is Protestant in order to gain her confidence. He has no relation to a foreign religion, and yet the landlady’s dubious question indicates how people at that time had an aversion to foreign countries.

Through the newsreel and Mrs. Shortley’s biased view in “The Displaced Person,” dismembered body parts are foregrounded with the image of a backward nation. The body politic as a corporate unity is the ideal of the United States owing to its national foundation and historical processes. Essentially, American national identity is founded on unity more than anything else. In addition, the analogy between the body politic and human body is often employed to explain the state as a political system (Herzogenrath 2). In this regard, it is also perhaps noteworthy that the word “dismemberment” implies

the division of a country. Historically, Poland has experienced such dismemberment several times. Thus, for Mrs. Shortley, the disjointed body parts found in the newsreel signify both undeveloped countries that are far from the American ideal and atrocities committed during the Holocaust. Equally suggestive is Mr. Guizac's physical image, which is connected with a lack of unity: "His whole face looked as if it might have been patched together out of several others" (313).

With these points in mind, we can now examine the concept of national advancement. Alexis de Tocqueville's comment in *Democracy in America* illustrates the significance of national development for American citizens: "All [American people] consider society a body in progress" (432). The enhancement of national prestige was an important political subject in Cold War America in which economic and technological progress were emphasized in contrast to communism. In "The Displaced Person," Mrs. Shortley takes pride in the progress of American society, saying "Over here it's more advanced than where they come from" (CW 290). It is noteworthy that religion is one of facts upon which she bases her judgment. She makes little account of Catholicism:

Mrs. Shortley looked at the priest and was reminded that these people did not have an advanced religion. There was no telling what all they believed since none of the foolishness had been reformed out of it. Again she saw the room piled high with bodies. (CW 288)

Her evaluation of how the United States and other countries progress applies even to religious matters, and immediately evokes the image of dismembered bodies once more. Since the Polish family is Catholic, her exclusionist attitude intensifies. Given the context in which Mr. Guizac represents Christ, as I will mention later, O'Connor appears to object to the American

myth of wholeness as related to an ideal national identity. In the 1950s, the Cold War, which entailed McCarthyism, required conformity from the American people. Moreover, the Truman doctrine caused many to claim that the policy was a form of American imperialism (Bostdorff 135). “The Displaced Person” expresses O’Connor’s anxiety about the current of the times.

Ironically, even though Mrs. Shortley reiterates the Polish displaced person’s lack of development, the reality is that Mr. Guizac is “an expert mechanic, a carpenter, and a mason” (292). Mrs. McIntyre is delighted to hire a person who can operate machines. On account of his outstanding abilities and unprecedented diligence, she declares, “That man is my salvation!” (294). Her admiration and the reference to “a carpenter” associates Mr. Guizac with Christ. Mrs. McIntyre even thinks about increasing his wages, but she cannot afford to do so. Therefore, the strong possibility of being fired becomes an object of concern among employees. What is striking in this story is that Mr. Guizac’s mechanical skills, which the other American characters lack, discloses an inherent contradiction between the national ideal and reality in the United States during the Cold War era.

According to Kim Salomon, several UNRRA officers testified that “many Polish DPs did not want to repatriate because they were ‘lazy and did not want to work’” (153). In a DP camp, they did not have to worry about meals every day. O’Connor, however, depicts the Polish displaced person as a skilled and energetic worker. Regardless of whether or not the Polish immigrants on the Andalusia farm were outstanding workers, the story presents a favorable image of Polish DPs, in contrast to historical reports. The difference is an evidence not to indicate O’Connor’s ignorance of or indifference to the actualities of the situations in which they lived, but rather to highlight her compassion for people facing difficulties.

What O'Connor idealizes in this story is the concept of the nation created from a multiplicity of identities rather than a nation as a unity centering on the majority. Mrs. Shortley, realizing that Mrs. McIntyre plans to discharge the Shortleys instead of the black employees, hurriedly packs and leaves the farm with her family before dawn. In a car crammed with two daughters, pets, and household goods, she suffers a heart attack: "She thrashed forward and backward, clutching at everything she could get her hands on and hugging it to herself, Mr. Shortley's head, Sarah Mae's leg, the cat, a wad of white bedding, her own big moon-like knee" (CW 304-5). This scene conjures the image of the "bodies of dead naked people all in a heap, their arms and legs tangled together, a head thrust in here, a head there, a foot, a knee," in the newsreel (287). Moreover, Mrs. Shortley's body is described as heterogeneous as Mr. Guizac's face "as if it might have been patched together out of several others" (313). The narrator tells us that Mrs. Shortley, just before her death, has "had a great experience or even been displaced in the world from all that belonged to her" and that her eyes seem "to contemplate for the first time the tremendous frontiers of her true country" (305). What is significant here is that O'Connor gives a positive meaning to displacement, in spite of its principal negative meanings including the image of dismemberment. The "true country" O'Connor shows is a nation based on ethnic and cultural diversity.

2. Against the Authority of Language

Historically and politically, language is deeply involved in the creation of a national identity. In 1788, Noah Webster, the first American lexicographer, asserted: "a federal language was nearly as necessary to national unity as the new Constitution itself" (Lepore 40-41). In "The Displaced Person," the heterogeneity of the Polish refugees is, according to the American characters,

chiefly derived from the issue of language. Regarding the language problem, Christina Bieber Lake observes that a fear of “the dirty Polish words” causes Mrs. Shortley to read the Bible more eagerly, making her self-righteousness clear to readers (43). The relation between language and social identity, however, remains largely unexplored in O’Connor studies. Because Mr. Guizac speaks English poorly, his twelve year-old son acts as an interpreter. Even so, it is necessary for people on the farm to communicate with Mr. Guizac directly concerning daily work. Worrying about a further increase of Polish families, Mrs. Shortley envisages an ethnic conflict with the image of language representing each country:

She began to imagine a war of words, to see the Polish words and the English words coming at each other.... She saw the Polish words, dirty and all-knowing and unreformed, flinging mud on the clean English words until everything was equally dirty. She saw them all piled up in a room, all the dead dirty words, theirs and hers too, piled up like the naked bodies in the newsreel. (CW 300)

Her imagination produces cogent evidence about the connection between language and national identity. Additionally, the words are replaced with human bodies so that an analogy with the body politics can be drawn. Her description of each language is based on the arbitrary superiority of English over other ones. Behind these descriptions lies the early Americans’ dominant attitude toward people considered different. According to Nancy C. Carnevale, initial colonists believed that “the English language was the only way to convert Native Americans to Christianity and thus redeem them from their ‘savage’ state.” The idea was grounded on “the association of different languages with the concepts of civilized and uncivilized that were thought to reflect the level of development of a people” (476). Mrs. Shortley’s prejudice against the Polish, including Catholicism, shares

an underlying disregard for racial and cultural others that corresponds with political violence in American history.

In a similar vein, I confirm the linguistic requirement imposed on immigrants in American society. “One language, one country, one flag” is a well-known patriotic slogan in the United States (Carnevale 479). Rosina Lippi-Green states: “English, held up as the symbol of the successfully assimilated immigrant, is promoted as the one and only possible language of a unified and healthy nation” (216). While English language skills are certainly valuable for immigrants searching for a better life in the United States, it seems undeniable that their assimilation by means of the control over language brings American imperialism into the open. Mrs. Shortley’s imaginative vision shows both American imperialistic desires and anxieties about the racial and cultural others. Mr. Shortley also makes a notable remark on this point:

“if I was going to travel again, it would be to either China or Africa. You go to either of them two places and you can tell right away what the difference is between you and them. You go to these other places and the only way you can tell is if they say something. And then you can’t always tell because about half of them know the English language. That’s where we make our mistake,” he said, “—letting all them people onto English....” (CW 324)

Mr. Shortley, referring to China and Africa, contrasts language with physical differences between races. Through his explanation, O’Connor foregrounds language as a form of discrimination lurking in our daily lives. As Robert Phillipson argues, there are similarities between linguistic discrimination and racism regarding “the advantage of the dominant group” (341). Ironically enough, in spite of using the subject “you,” Mr. Shortley talks of overseas travel to the black employee. It is worthwhile to note that he asks the black boy, “Whyn’t you go back to Africa?” (CW 323). The black employee is a descendant of black slaves who

had been brought by force. The poor white's indiscreet utterance, therefore, provides important insight into the status of African Americans as displaced persons. Furthermore, it is necessary to remember that the ancestors of African Americans were deprived of their mother tongues through an imperialistic language policy.

Moreover, we must not ignore the Catholic priest, a person who takes the Polish family to the farm, speaking "in a foreign way himself, English but as if he [has] a throatful of hay" (*CW* 288-89). O'Connor repeatedly emphasizes his dull pronunciation such as "Arrrrrrr!...What a beauti-ful birdrrrd!" (289). His manner of talking, which shows that he is an immigrant, makes him appear stupid from the viewpoint of the American characters, as Mrs. Shortley remarks, "He don't look smart...—kind of foolish" (292). Carnevale reports on the problem of accuracy in immigrant English:

The dominant society's concern with language was reflected in a preoccupation with the proper usage of English. Fears regarding the degradation of the "American stock" through the introduction of racially inferior immigrants were reflected in concerns that the English language was becoming debased by foreign speakers. (479)

This account reveals the desire of the United States to maintain the purity of the English language. According to Richard W. Bailey, a great flood of immigrants has usually enhanced interest in linguistic purity (237-44). O'Connor treats language as a controversial subject in order to disclose the inconsistencies between American democracy and exclusivism.

In several points, we can be fairly certain that O'Connor shares a sense of estrangement with him. Most critics would accept that O'Connor was not a good speller because misspellings appear often in her letters. As Brad Gooch points out, O'Connor "did much better in English," but spelling continued to be

her “lifelong issue” (35). Furthermore, her experience in Iowa warrants attention as a means of exploring her affinity with the Polish displaced person. O’Connor’s relationship with Paul Engle, the director of the Iowa Writer’s Workshop, was extremely valuable to her career as a writer. Engle affectionately remembers the day when he first met O’Connor:

She walked into my office one day and spoke to me. I understood nothing, not one syllable. As far as I knew, she was saying ‘Aaaaraaaraarah.’ My God, I thought to myself, this is a retarded young girl. (McCarthy)

Despite being a native English speaker, O’Connor faced the unpleasant experience of being treated as a non-native speaker. To add to O’Connor’s heavy Southern accent, Engle’s recollection throws fresh light on how O’Connor comprehends a displaced person’s difficulty with language. Near the end of the story, Guizac dies in a tractor accident. One should not overlook the fact that Mrs. McIntyre notices the priest whispering in Guizac’s ear: “Mr. Guizac’s body was covered...by a black one which hung over him, murmuring words she didn’t understand” (*CW* 326). It may be that the priest offers a prayer and “Communion” for the departed in “Latin” (Kirk 51). What is linked with the sacred is not English but rather Latin, which is the basis for numerous languages. Latin is genetically related to Indo-European languages, and a large number of English words find their roots in Latin. Although this foundational language has become unused on a daily basis, O’Connor, nevertheless, emphasizes the sacred distinctiveness of Latin, thereby challenging the supremacy of English. Insofar as immigrants, despite their status as linguistic minorities in the United States, learn two or more languages, they attain higher intellectual level than Americans who are only able to understand English. Sympathizing with linguistically disadvantaged immigrants, O’Connor criticizes the

imperialistic tendency of postwar America which was trying to forge a standardized national identity.

3. Political and Religious Doctrines

Generally speaking, a former soldier earns public accolades because of his patriotic contribution to national prosperity. An important point to note is that Mr. Shortley, a poor white, served in World War I. In a community, a person who has enlisted for military service is in a better position than those who have not. In this regard, Mr. Shortley is a striking contrast to The Misfit in “A Good Man Is Hard to Find” who declares himself an outlaw regardless of his military service record. Mr. Shortley attributes his wife’s death to the Polish displaced person. His dissatisfaction increases because Mrs. McIntyre does not seem to be in any hurry to fire Guizac. Despite his low social standing, Mr. Shortley pressures his employer, calling upon his career as a serviceman:

“A white man sometimes don’t get the consideration a nigger gets,” he said, “but that don’t matter because he’s still white, but sometimes,...a man that’s fought and bled and died in the service of his native land don’t get the consideration of one of them like them he was fighting. I ast you: is that right?” (CW 319-20)

His insistence derives from a deep conviction that patriotic allegiance carries greater weight than maintaining the consistent racial order centered on white supremacy. Here, the circumstances of African American soldiers in the 1950s are worth examining. Although black men’s enlistment increased and racially mixed units were formed during the Korean War, Maria Höhn refers to a problem: in 1952, “the military command expressed concern over interracial fraternization by pointing out that black soldiers would not fit into the segregated society for the South again when they returned home” (153). The comment

reveals that African Americans' patriotic contribution did not receive an appropriate consideration. Thus, it cannot be denied that Mr. Shortley's claim is based on white-centered Southern ideology.

In this context, O'Connor poses the unignorable question of conformity. Mr. Shortley's irrelevant animosity toward the Polish displaced person is an extremely private problem, but he nevertheless brings it into the public sphere. He begins "to complain and to state his side of the case" to everyone he sees (CW 323). By taking advantage of patriotism, the poor white employee acquires leverage to steer public opinion:

Mrs. McIntyre found that everybody in town knew Mr. Shortley's version of her business and that everyone was critical of her conduct. She began to understand that she had a moral obligation to fire the Pole and that she was shirking it because she found it hard to do. (CW 324)

The community begins to pressure Mrs. McIntyre to discharge the displaced person. The community's response, which is based on patriotism, is reminiscent of McCarthyism and its problematic investigations into disloyalty. Mrs. McIntyre is regarded as a person resisting the conformity that was expected of all American citizens during the Cold War era. Her alienation from the community brings her into line with the displaced persons.

The relation between Polish refugees and military service was a matter of national concern in the early 1950s. At this point, one must take a look at the news about Tadeusz Wyrwa, a Polish displaced person. In 1950, Wyrwa received an order from the American Army to serve in the Korean War. He refused conscription, "justifying his decision with the argument that he was a Polish officer obliged to follow only orders of the legal Polish (that is, London government) authorities" (Bukowczyk 162). The newspapers such as the *American Press* and *Chicago*

Tribune reported Wyrwa's refusal and commented on "the ingratitude of displaced persons" (Jaroszynska-Kirchmann 186). Consequently, a heated controversy arose in various parts of the United States.²¹ Although preceding critics have not referred to this case, it is reasonable to assume that it has an association with "The Displaced Person." The community's positive reaction to Mr. Shortley's discontent fully reflects American social conditions in the early 1950s.

It is desirable to fully investigate Mrs. McIntyre's character to elucidate upon O'Connor's views on a private person thrust into the public sphere. Mrs. McIntyre wishes to dismiss the "sorry people" who drain her resources, such as the "Ringfields and Collins and Jarrells and Perkins and Pinkins and Herrins and God knows what all else and not a one of them left without taking something off this place that didn't belong to them" (CW 293). Nevertheless, she has "never discharged any one before" (322) because they all left voluntarily. This was convenient for the timid employer. For that reason, the dismissal of the Polish displaced person is not easily carried out. Pressured, she dreams that the Polish family moves into her house and, inversely, she with Mr. Shortley. This dream shows her apprehension about becoming a displaced person herself. Mrs. McIntyre, like the refugees, feels a sense of estrangement. Incidentally, it should be added that, given the connection between the displaced person and Christ, from a religious viewpoint Mrs. McIntyre is presented positively. By means of patriotism and Mrs. McIntyre's timorous character, O'Connor highlights the power imbalance between an individual and a community, and considers the potential danger of collectivity for a private person.

The most important point, however, is to comprehend how O'Connor treats the national policy for refugees in the story. Here, it is worth noting that O'Connor shows patriotism from another angle. During wartime, such as the Cold War, a body

politic demands that a private person shows allegiance to it. Mrs. McIntyre accepts some displaced persons, thereby complying with government policy. The point to note is that the national policy and patriotism both seem to be in favor of giving aid to the refugees, whereas the political structure indicates that authority has an advantage over an individual. In spite of her skepticism toward Catholicism, Mrs. McIntyre courteously meets the priest and the Polish displaced persons, “wearing her best clothes and a string of beads, and...bounding forward with her mouth stretched” (285). Mrs. Shortley is extremely surprised to see the employer respectfully receiving a hired man and his family. In a sense, Mrs. McIntyre’s favorable manner of dealing with the displaced Polish family is an expression of the national loyalty required during the early Cold War era. Even so, her deferential attitude is beneficial to the underprivileged people, displaying a positive effect of the national policy. In contrast to the white-centered political strategy, government refugee service programs promote ethnic and cultural diversity. Regarded in this light, O’Connor supports the national policy as long as it is profitable to the socially disadvantaged.

It is likely that at that time, conservative Southerners opposed to the reception of the refugees. An unfavorable reaction against the refugees is, as mentioned previously, delineated through the anti-foreign attitudes of the Shortleys and other people in the town. Mr. Guizac’s death may also strengthen the negative impression about the displaced persons. Actually, there is a marked tendency to regard O’Connor as a conservative Southern writer. Nevertheless, the association between the Polish refugee and Christ indisputably demonstrates that O’Connor takes the side of the displaced persons. Therefore, one can say that, by contraries, O’Connor offers a Northern liberal viewpoint in the story.

More noteworthy is the link between political and religious

images. In the closing paragraph of the story, Mrs. McIntyre, being in poor physical condition, is helplessly cut off from the community: “Not many people remembered to come out to the country to see her except the old priest” (CW 326). The farm owner’s situation accentuates her affinity with a displaced person. The story ends with the scene where the priest, sitting at her bedside, explains “the doctrines of the Church” (327). Since O’Connor rarely uses the word “doctrine” in her fiction, there is a possibility that she provides an intentional suggestion here. After reviewing the impact of the government policy, it does not seem overbold to assume that “the doctrines” bears political connotations. In a sense, the last scene suggests the difficulty of escaping from political doctrines. One may say that the story presents both the possibility of redemption in the religious realm and the bottled-up feeling of an individual under the conditions of the Cold War politics. Catholic and political doctrines, however, are skillfully blended through the image of a displaced person. This inconsistent mixture of the sacred and secular expresses a slight hope for a private person, even if there is no escape from the body politic while living in modern society.

4. Toward Deterritorialization

Although little attention has been given to O’Connor’s description of Polish immigrants, the distinct portrayal of characters is extremely important. In the 1950s, many Polish Americans were actively involved in professional sports such as baseball and the world of entertainment. In spite of their brilliant successes, a negative image of the group was widely disseminated: Polish Americans were uneducated and rowdy. W. Scott Ingram attributes the cause, in part, to Tennessee Williams’ play, *A Streetcar Named Desire*, which was a Broadway hit and turned into a movie in 1951. Marlon Brando played

Stanley Kowalski, a brutal Polish American. Ingram explains that “William’s creation of Kowalski, coupled with the facts that most Polish Americans were employed in manufacturing jobs and not college educated, added to the unfair stereotypes of Polish Americans” (74). In contrast to Williams, O’Connor depicts them as courteous and diligent. To take a simple example, Guizac “bob[s] down from the waist” and kisses Mrs. McIntyre on the hand at their first meeting (*CW* 286). O’Connor’s characteristic expressions of Polish immigrants signify her challenge of preconceived notions that adversely affect a marginalized population.

O’Connor’s effort to stand alongside the weak discloses the unexpected violence caused by a conservative American race consciousness. Guizac, without consulting Mrs. McIntyre, attempts to let Sulk, a black employee, get married to his young cousin, an orphaned Polish girl in a refugee camp, in order to save her from that miserable situation. Realizing his relief plan for the girl, however, Mrs. McIntyre raises an objection to Guizac. The difference in their attitudes toward race is foreshadowed in the early part of the story. Mrs. McIntyre and Mrs. Shortley prepare curtains for the Polish refugees, and yet they cannot get a full set of the same color. In so doing, Mrs. Shortley comments, “They can’t talk,...You reckon they’ll know what colors even is?” (287). The ability to speak English is arbitrarily connected with another capability. With an imperialistic idea concerning language, her remark metaphorically foreshadows that the Polish displaced person would not care about the problem of the color line in American society.

O’Connor penetrates the cruelty of conservative racial consciousness in a peculiar way. Guizac gives a photograph of the girl, who apparently lives in a good condition, to Sulk. However, he shows Mrs. McIntyre another picture because she rejected his attempt:

He...took out another picture of the same girl, a few years older, dressed in something dark and shapeless. She was standing against a wall with a short woman who apparently had no teeth. "She mamma," he said, pointing to the woman. "She die in two camp." (CW 314)

Keeping her inflexible attitude, Mrs. McIntyre replies, "This is my place...I am not responsible for the world's misery" (314-15). Her unsympathetic response manifests the whites' egoistic attitude toward persecuted and oppressed people. It is probably true that at that time of its publication, this Polish girl evoked images of Anne Frank. In 1952, *Anne Frank: The Diary of a Young Girl* was translated into English, and acquired great attention. In the diary, Anne writes about a confrontation with her mother. Her mother's advice for melancholic people is "Think of all the misery in the world and be thankful that you are not sharing in it!" On the other hand, Anne says, "Think of all the beauty that's still left in and around you and be happy!" (184). Of course, Anne's mother is totally different from Mrs. McIntyre, and yet Mrs. McIntyre's expression, "the world's misery" calls up the diary's "all the misery in the world." Given the resemblance, there is a distinct contrast in the way Anne and Mrs. McIntyre approach terrible affliction. The story that Guizac's daughter tells, also conjures up the image of Anne Frank: "Sledgewig said that in Poland they lived in a brick house and one night a man come and told them to get out of it before daylight" (CW 298).

By invoking the link between the Polish girls and Anne Frank, O'Connor foregrounds the menace caused by racist bigots. Along with cultural differences regarding marriage, it is worth noting that the eager desire of the whites to keep their race pure calls to mind the Nazi policy of racial purity. Through the unanticipated association with Nazism, the negative side of American society is exposed. Mrs. McIntyre regards herself as an independent

individual standing against the nation, but at the same time she joins the authorities' side because she holds the right to decide which person to fire and which to allow to work.

The Guizacs and the Polish female cousin are powerless private persons with no country. Hazel Motes in *Wise Blood* is also considered a displaced person. The narrator says that "he had known all along that there was no more country" (CW 117), immediately after which a police officer destroys his car. Finally, he is killed by another police officer representing the authorities. While these two stories illustrate the vulnerability of individuals, O'Connor depicts Hazel Motes and Guizac as characters that suggest Christ in that their powerlessness within a secular society is connected to divinity.

The exclusivist attitude toward the marginalized others gives rise to a tragedy: Guizac's death in a tractor accident. Although Mr. Shortley, Mrs. McIntyre, and the black employee recognize the dangerous conditions, no one warns Guizac. This tacit conspiracy by a group of Americans in the death of the Polish refugee is associated with the stifling atmosphere of the Cold War era. While for the American government Guizac is a person whom America must protect against Communism, this policy is reversed by American citizens, who feel that they must protect themselves within the traditional hierarchy and the lingering war-era mindset of limited resources. The tragedy that befalls Guizac makes Mrs. McIntyre feel as though she were a displaced person: "She felt she was in some foreign country" (326). It is observably true that national policies invade the private sphere of individuals. In "The Displaced Person," however, the individual self has the potential to link with the sacred by the paradoxical effects of national policies.

O'Connor's affirmative notion of being a displaced person offers a way to rethink territorialism. Concerning this point, the peacocks in "The Displaced Person" warrant attention. It is a

matter of common knowledge that O'Connor felt strong affection for peacocks. Just as on the Andalusia farm, there are peacocks on Mrs. McIntyre's farm. However, compared with the old days, their number is decreasing. Hearing that the old black employee mutters something sarcastic about the decline, Mrs. McIntyre angrily states, "when that peachicken dies there won't be any replacements" (309). The peacocks, being relegated, imply an association with the displaced person. Similarly, when the priest sees the bird spread his tail, he cries "Christ will come like that!" While Mrs. McIntyre considers him to be "an idiotic old man," he murmurs, "[t]he Transfiguration" (317). The nexus between peacocks and Christ is absolutely obvious here.

Moreover, O'Connor connects the birds with the image of universal geography:

He [the peacock] had jumped into the tree and his tail hung in front of her [Mrs. Shortley], full of fierce planets with eyes that were each ringed in green and set against a sun that was gold in one second's light and salmon-colored in the next. She might have been looking at a map of the universe but she didn't notice it any more than she did the spots of sky that cracked the dull green of the tree. (CW 290-91)

By means of the imagery of planets, O'Connor presents the expanse of the universe beyond territorialism. It is crucial to remember that, in this context the story contains references to China and Africa. O'Connor's concern about Asia is scarcely examined in previous studies, and yet there are interesting references to Asia in her fiction. I also point out O'Connor's resistance to cultural homogenization by exploring tattoos related to American colonialism in "Parker's Back."³ Additionally, one should recall the positive implication of linking black people to the displaced persons. These details provide evidence of O'Connor's global concerns. Although Mrs. McIntyre and Mrs. Shortley do not realize the divinity that peacocks

entail, they have experiences as displaced persons from their interactions with the Polish refugees. Through the association between Christianity and national secular policies, O'Connor, apprehensive about the United States' imperialistic tendencies in the 1950s, captures the individuals' forlorn state. The story signifies that to be a displaced person means being in the favorable condition of having been released from territorialism. This viewpoint enhances our imagination regarding the cultural others. Such a consideration leads to the new possibility that "The Displaced Person" involves the concept of deterritorialization that retains an enduring appeal at the present time.

Notes

- 1) Gooch enumerates newsreel titles referring to the story: "What to Do with Germany" (October 1944), "18 Million Orphans" (November 1945) and "Justice Comes to Germany" (November 1945) (244).
- 2) Although "a court decision freed Wyrwa from the obligation military service in the American Army" in 1952, he left the United States, suffering disappointment (Bukowczyk 162).
- 3) For elaboration of this argument, see Horiuchi (2011).

Works Cited

- Bacon, Jon Lance. *Flannery O'Connor and Cold War Culture*. New York: Cambridge UP, 1993.
- Bailey, Richard W. *Images of English: A Cultural History of the Language*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Burke, William. "Displaced Communities and Literary Form in Flannery O'Connor's 'The Displaced Person.'" *Modern Fiction Studies* 32.2 (1986): 219-27.
- Bostdorff, Denise M. *Proclaiming the Truman Doctrine: The Cold War Call to Arms*. College Station: Texas A&M UP, 2008.
- Bukowczyk, John J. *Polish Americans and Their History: Community, Culture, and Politics*. Pittsburg: The U of Pittsburg P, 1996.
- Carnevale, Nancy C. "Immigration and Language." *A Companion to American Immigration*. Ed. Reed Ueda. Malden: Blackwell, 2006. 471-91.

- Carroll, Rachel. "Foreign Bodies: History and Trauma in Flannery O'Connor's 'The Displaced Person.'" *Textual Practice* 14.1 (2000): 97-114.
- Daniels, Roger. *Coming to America: A History of Immigration and Ethnicity in American Life*. New York: Harper Perennial, 1991.
- Doriza, Garifallia. "The Rise of the I-It World in Flannery O'Connor's Monologic Community." *Literature & Theory* 19.4 (2005): 311-26.
- Frank, Anne. *Anne Frank: The Diary of a Young Girl*. Trans. B. M. Mooyart-Doubleday. New York: Doubleday, 1952.
- Ford, Lynne E. *Encyclopedia of Women and American Politics*. New York: Facts On File, 2008.
- Gooch, Brad. *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*. New York: Little, Brown, 2009.
- Herzogenrath, Bernd. *An American Body/Politics: A Deleuzian Approach*. Lebanon: UP of New England, 2010.
- Höhn, Maria. "Heimat in Turmoil: African-American GIs in 1950s West Germany." *The Miracle Years: A Cultural History of West Germany, 1949-1968*. Ed. Hanna Schissler. Princeton: Princeton UP, 2001. 145-63.
- Horiuchi, Kaori. "The Resistance of the Privatized Body: Tattoos as a Site of Conflict in Flannery O'Connor's 'Parker's Back.'" *Journal of the American Literature Society of Japan* 9 (2011): 37-52.
- Ingram, W. Scott. *Immigration to the United States: Polish Immigrants*. New York: Facts On File, 2005.
- Jaroszyńska-Kirchmann, Anna D. *The Exile Mission: The Polish Political Diaspora and Polish Americans, 1939-1956*. Athens: Ohio UP, 2004.
- Kirk, Connie Ann. *Critical Companion to Flannery O'Connor*. New York: Facts On File, 2008.
- Lake, Christina Bieber. *The Incarnational Art of Flannery O'Connor*. Macon: Mercer UP, 2005.
- Lepore, Jill. *A Is for American: Letters and Other Characters in the Newly United States*. New York: Alfred A. Knopf, 2002.
- Lippi-Green, Rosina. *English with an Accent: Language, Ideology, and Discrimination in the United States*. New York: Routledge, 1997.
- McCarthy, Colman. "Servant of Literature In the Heart of Iowa; Paul Engle's 50 Years Of Bringing People Who Write to a Place Where People Farm." *Washington Post* 27 Mar. 1983: G1+.
- O'Connor, Flannery. *Collected Works*. New York: The Library of America, 1988.
- . *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Farrar, 1988.

- Phillipson, Robert. "Linguicism: Structures and Ideologies in Linguistic Imperialism." *Minority Education: From Shame to Struggle*. Ed. T. Skutnabb-Kangas and J. Cummins. Clevedon: Multilingual Matters, 1988. 339-58.
- Porter, Russell. "21 U. S. Red Leaders Indicted on Charges of Conspiracy; 17 Arrested, 4 Still Sought." *New York Times* 21 June 1951, late ed.: C1+.
- Salomon, Kim. *Refugees in the Cold War: Towards a New International Refugee Regime in the Early Postwar Era*. Lund: Lund UP, 1991.
- Taylor, Alan C. "Redrawing the Color Line in Flannery O'Connor's 'The Displaced Person.'" *Mississippi Quarterly* (2012): 69-81.
- Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America*. Trans. Arthur Goldhammer. New York: Library of America, 2004.

【会 則】

平成 25 年 3 月 25 日制定

平成 25 年 3 月 25 日施行

第 1 条 本会は日本フラナリー・オコナー協会 (The Flannery O'Connor Society of Japan) と称し、略称を FOSJ とする。事務局を附則のとおり置く。

第 2 条 本会はフラナリー・オコナーを中心として、関連ある作家や文学の流れについて研究を行うことを目的とする。

第 3 条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 年次大会の開催
2. 機関誌等の発行
3. アメリカの The Flannery O'Connor Society その他内外の関係学会との連携
4. その他必要と認められる事業

第 4 条 本会の会員は第 2 条の趣旨に賛同し、所定の会費を納入するものとする。

2. 会員は、普通会员・賛助会員・学生会員の三種類とする。

3. 会費は年額とし、次の区分による。

普通会员 ¥5,000 賛助会員 ¥10,000 以上 学生会員 (博士課程まで) ¥3,000

4. 会費の納入が 3 年間滞った場合は、その年度末をもって自動的に退会とする。

第 5 条 本会に次の機関を置く。

総会 役員会

2. 総会は本会の最高議決機関であり、毎年 1 回会長が招集する。

3. 役員会は役員をもって構成し、本会の運営にあたる。

役員会は必要に応じ各種の小委員会を設けることができる。

第 6 条 本会に次の役員を置く。役員の任期は 3 年とし再任を妨げない。

会長 1 名 副会長 1 名 事務局長 1 名 幹事若干名 監査 2 名

2. 役員は総会において会員が互選する。

3. 役員の役職は、総会において役員が互選する。

4. 会長は本会を代表して会務を統括し、副会長は会長を補佐する。

5. 幹事は事務局長の職務を補佐し、会務を執行する。

6. 監査は本会の財務および会務執行状況を監査する。

第 7 条 本会に顧問を置くことができる。顧問は役員会の推挙により、会長が委嘱し、会長及び役員会の諮問に答える。

第 8 条 本会の経費は会費及び寄付金により支弁する。

本会の会計年度は毎年 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。

第 9 条 本会則の改正は総会の承認を経なければならない。但し、付則の事務局に関する箇所については、事後承認とすることができる。また改正年月日の記入も省略することができる。

附則 1. 本会の準備委員会を平成 24 年 8 月 3 日、日本大学理工学部に於いて発足する。

附則 2. 本会の事務局を平成 25 年 3 月 25 日より、千葉県船橋市習志野台 7-2-1

日本大学理工学部一般教育教室英語系列 中村文紀研究室に置く。

附則 3. 会則は平成 25 年 3 月 25 日から施行する。

【投稿・執筆規定】

◆投稿規定◆

1. 本誌は、フラナリー・オコナー協会の学会誌であり、原則として年に1回発行する。
2. 投稿原稿は、フラナリー・オコナーに関連する論文とし、未発表のものに限る。但し、学会で口頭発表したものについては、その限りではない。その旨を注に明記すること。
3. 応募締切 毎年5月末日
4. 原稿送付方法 原稿をワードの添付書類としてメールで編集責任者に送ること。その際、略歴（所属学校・機関、身分）をメールの本文に記入すること。
5. 原稿採択方法 査読委員による査読を経て決定する。
6. 校正 校正は2校までとする。初校は1週間以内、再校は3日以内に返送すること。
7. 上記以外の案件については、協会役員会における判断が優先される。

◆執筆要項◆

1. 字数 和文論文は12,000字程度、英文論文は7,000語程度を目安とする。
2. 書式 和文はMS明朝、英文はCenturyとし、いずれもフォントは12ポイントで横書きとする。
3. 本文の注記
 - a) アラビア数字を用い、文末注（後注）とする。
 - b) 外国の人名・地名・書名は、初出の箇所日本語の後ろの（ ）内に併記する。
4. 書式の詳細については、『MLA 新英語論文の手引き』（北星堂）、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*の最新版を参照のこと。
5. 執筆者負担金は本誌出版後、事務局で負担額を算定し、執筆者に通知する。

【報 告】

◆設立大会◆

日時：平成 25 年 3 月 26 日（火）15:00～18:00

場所：日本大学理工学部駿河台校舎 5 号館 2 階 524 会議室

総合司会：田中 浩司 氏（防衛大学校）

- ✕ 開会のことば／会場校あいさつ
- ✕ 設立にあたって
設立準備委員会副委員長 田中 浩司 氏
- ✕ 特別シンポジウム 「日本におけるフラナリー・オコナー研究史」
司会・講師：野口 肇 氏（設立準備委員会委員長／首都大学東京 名誉教授）
講師：渡辺 佳余子 氏（元・東京成徳短期大学）
講師：中村 文紀 氏（日本大学）
- ✕ 設立記念講演
演題：フラナリー・オコナーの小説世界——アメリカ南部の時空を超えて
講師：前田 絢子 氏（フェリス女学院大学 特任教授）
司会：野口 肇 氏
- ✕ 総会
- ✕ 閉会のことば

◆第 2 回大会◆

日時：平成 26 年 3 月 26 日（火）15:00～18:00

場所：日本大学理工学部駿河台校舎 5 号館 2 階 524 会議室

総合司会：渡辺 佳余子 氏（元・東京成徳短期大学）

- ✕ 開会のことば／会場校あいさつ
- ✕ 作品研究 "The Comfort of Home"
コーディネーター：中村 文紀 氏（日本大学）
- ✕ オープンディスカッション 「cartoonist としてのフラナリー・オコナー」
モデレーター：中村 恭子 氏（白百合女子大学・非）
- ✕ 総会
- ✕ 講演
演題：若き日のフラナリー・オコナー——『祈りの記』に寄せて
講師：野口 肇 氏（日本フラナリー・オコナー協会会長／首都大学東京 名誉教授）
- ✕ 閉会のことば

【編集後記】

昨年本協会が設立され、今年会誌『フラナリー・オコナー研究 創刊号』が今回無事発行されるに至り、日本におけるフラナリー・オコナー研究の足場のみならず、アメリカ文学研究の足場がまた一つ固まった。オコナー没後 50 周年にあたる今年、日本においてこのような研究誌が創刊されるなどということは、オコナー本人自身も予期していなかったことであろう。本研究誌は紙媒体及び電子媒体で発行され、当協会のホームページ上に掲載されるのみならず、アメリカ・ジョージア州の The Flannery O'Connor Society、Flannery O'Connor-Andalusia Foundation 及び Flannery O'Connor Childhood Home Foundation にも配信されるため、本誌に掲載された論文は、日本の研究者だけでなく、国外の、特に本場アメリカのオコナー研究者の目にも触れることになる。国内外の様々な研究者の眼差しのもと、日本におけるオコナー研究が一層進展することを期待するものである。

(田中)

【執筆者紹介】

- ㊦ 野口 肇 (首都大学東京名誉教授)
- ㊦ 堀内 香織 (中央大学非常勤講師)

『フラナリー・オコナー研究』 創刊号

The Journal of Flannery O'Connor

ISSN 2188-9716

平成 26 年 9 月 30 日発行

発行者 日本フラナリー・オコナー協会

[事務局] 274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1

日本大学工学部一般教育教室英語系列 中村文紀研究室